

武 覚超著

『天台教学の研究——大乘起信論との交渉——』

山 野 俊 郎

本書は、「天台教学と起信論」の論題で天台宗教学振興資団に提出された著者の特別研究者研究論文に、若干の増補と校訂を加えて、公刊したものである。中国の天台宗において最初に起信論の教説（真如不變隨緣説）を天台教学に導入依用したのは、六祖荆溪湛然であるとされ、更に趙宋天台の山家・山外の論議にあっても起信論が大きな役割を果たしたことが知られている。また日本天台においても伝教大師最澄が起信論の教義を採用して以来、それは円教位の法門として天台教理の進展にまことに大きな影響を与えたと言わなければならない。本書は、著者の言を借りれば、「最近の仏教学界で殆ど顧みられていなかった『天台教学と大乘起信論との思想的交渉』の問題を取り扱ったもの」であり、『起信論』の学説との関係や交渉が顕著にみられる天台教理の諸項目を取りあげて、中国・日本の両天台における思想史的展開とその特質を明らかにする」（本書はしがき）ものである。著者の武覚超師は現在、叡山学院の教授の職にあるが、その若き日の大学院時代を、本書の故・安藤俊雄博士及び、横超慧日博士の下にあって、天台学の研鑽を積み果たしと聞く。このたび「起信論との交渉」という極めて重要な

視点から天台教学の諸論題を取りあげ考察する本書が上梓されたことは、誠に慶ばしいことである。

本書は十章から成る。第一章から第五章までは主として日本天台における、また第六章から第十章までは中国天台における問題が取り扱われている。以下、各章の内容を概観し紹介してみたい。

第一章 「天台の真俗二諦説と『起信論』——俗諦常住説への展開——」

日本天台においては真俗二諦説に関して、あらゆる事物や現象をそのまま絶対肯定するという「俗諦常住」の説が重視され、論義の題目としても盛んに取り上げられたが、この傾向は特に天台本覚法門で顕著であるとされる。著者は俗諦常住説の進展において起信論の真如縁起法門が重要な役割を果たしたことを指摘し、この章では天台宗における真俗二諦の理解の変遷をたどり、とくに起信論との交渉に着目しつつ俗諦常住説の思想的展開を考察している。著者はまず中国天台の天台大師智顗及び六祖荆溪湛然を、次いで日本天台の最澄、円仁、円珍、安然、源信、恵心学派、証真を順次とりあげ、それぞれの二諦説を検討している。日本天台においては、まず伝教大師最澄の二諦説に考察が加えられる。最澄の二諦説の特色として其の真如觀をとりあげ、彼が起信論の隨縁・不變の二真如の説を採用し、とくに隨縁義を重視していたことが指摘される。著者によれば、最澄には「俗諦常住」なる用語は見られないが、彼が隨縁義を

強調したことは俗諦的方面への重視を示すものであるという。

次に、慈覚大師円仁には俗諦不生不滅論一卷があるが、著者はこの著作の特色として、真俗二諦と起信論の不変・随縁との關係を論じ、真諦を不変に、俗諦を随縁に對配したこと、及び法華經方便品の「世間相常住」の經文を俗諦常住の文証としたこと、の二点を挙げる。また、円仁が密教の立場から真如隨縁説に注目して真俗円融不二を唱えたことを論述し、そこに円仁の真俗二諦説の發揮点があると指摘される。次に、最澄や円仁、円珍による起信論の真如隨縁説導入の立場を承け、五大院安然が緣起法門を天台の藏通別円の四教に分判したことが説明される。安然は『起信論』は真如に不變と隨縁の二義を立て、しかも真如の本体がそのまま諸法と説くが故に円教位の法門だと判定した（本書一九頁）のであり、「これは俗諦常住説の基調をなす『起信論』の隨縁説が天台の中核に位置づけられたことを示すものであった」（二〇頁）と著者は指摘する。次いで恵心僧都源信、及び源信の淨土教の流れをうける恵心学派の二諦説と起信論の関わりに言及し、最後に宝地房証真的二諦説が検討される。証真是安然の教説をうけ、起信論の直如隨縁説を円教の法門と理解したのであるが、更に彼独自の學説として、天台円教の空仮中のいわゆる円融三諦と真如隨縁説との結びつきが見られるという。すなわち、不變真如の真諦を中道（体・仏界）にあて、そして隨縁真如の俗諦を空假（用・九界）にあてたことが指摘される。

## 第二章 「天台の菩提心説と『起信論』」

著者はこの章で、まず天台智顗の菩提心の理解を述べ、次いで起信論の所説との関連を中心に日本の天台宗の安然、良源及び源信の菩提心説を論究し、最後に華嚴宗の學僧凝然のそれに言及する。智顗は四種四諦（生滅・無生・無量・無作）、四弘誓願、及び六即（理即・名字即・觀行即・相似即・分真即・究竟即）の三つの教説によって菩提心の概念を規定しているが、著者は智顗の菩提心説の特色が生死と涅槃、煩惱と菩提の絶対相即を説く円教無作四諦の原理にもとづく点にあるとし、「無作四諦の原理は四弘誓願や天台の行位である六即説の基本理念をなし、これら四諦・四弘・六即の三者が有機的に機能したところに天台の菩提心たる独自性がある」（三七頁）と指摘する。次に、日本の天台密教の大成者である五大院安然には、菩提心に関する著述として胎藏金剛菩提心義略問答抄五卷がある。日本天台では安然が初めて起信論の三種菩提心（信成就発心・解行発心・証発心）を天台の菩提心説に導入したとされるが、著者は、安然においては起信論の菩提心義が円教の法門に属するものとして受容され、かつそれが占察善惡業報經や賢首大師法藏的起信論義記の影響の下に五十二位説として理解されたことを論証している。また菩提心論に説かれる密教の三種菩提心（行願・勝義・三摩地）を安然は重視し、とくに真言密教独自の菩提心である三摩地心を凡夫地より発す衆生本有の菩提心と解釈したのであり、それと対応して、天台円教の立場から理即菩提心という安然独自の菩提心説が成立したことが論述される。

次に、叡山中興の祖と仰がれる慈恵大師良源には浄土教関係の著述として極楽浄土九品往生義一卷がある。この著において良源が、起信論で信成就発心の相として立てられる三心（直心・深心・大悲心）と観無量寿經の上品上生段に説かれる三心（至誠心・深心・廻向発願心）、及び維摩經仏国品の三心（直心・深心・大乘心）とを対比し、これら二經一論の三心を同一のものと見なし、この三心をもって円教菩提心と把握したことが指摘される。次いで、恵心僧都源信の往生要集に説かれる菩提心説をとりあげ、源信が摩訶止観の所説を承けて、菩提心を四弘誓願と理解し、これを理を縁とする四弘（縁理四弘）と事を縁とする四弘（縁事四弘）に分類したとされる。このうち縁事の四弘誓願は三聚淨戒・三徳心・三因仏性・三身などの諸概念と結びつけて解釈されるが、著者は、源信のこのような見解が法蔵の起信論義記の菩提心釈や、それを継承した明曠の天台菩薩戒疏の教説などを参照して成立したものであることを論述している。最後に鎌倉時代後期の華嚴宗東大寺の学僧凝然の菩提心説を、その晩年の著作である維摩經疏菴摩羅記に説かれる維摩經の三心釈を通して考察している。そこで凝然は維摩經、観無量寿經、及び起信論の二經一論の三心が全同であることを主張しているが、著者は凝然のこの三心釈が叡山浄土教の伝統的解釈を受け継いだものであることを指摘し、その系譜について検証している。

### 第三章 「天台の九識説と『起信論』」

著者によれば日本天台の口伝法門においては種々の九識説が唱えられ、口伝法門独自の思想が形成されたが、その思想的基調となったのが起信論の九識説であったという。この章では円珍及び安然の九識について考察し、更に天台口伝法門において唱えられた多種多様な九識説をとりあげ検討している。まず著者は、円珍が南岳慧思撰と伝えられる大乘止観法門の心識説を九識説と解釈し、かつそれを円教義として受容したこと、そして、円珍の九識説を承け、安然において起信論九識説が確立されるのであり、又それが円密の法門と規定されたことを論述する。次いで、安然の起信論九識説を思想的基盤として、天台口伝法門において種々の九識説が立てられることになったとし、それを「阿字九識説」以下、「超九識説」に至る七種に分類して、それぞれ考察を加えている。

#### 第四章 「円密一致と『釈摩訶衍論』」

本章で著者は、安然による釈摩訶衍論（釈論）の十識説受容の問題を検討する。龍樹造、筏提摩多訳と伝えられる釈摩訶衍論十巻は起信論を詳釈するものだが、八世紀頃に成立した偽作とされる。真言宗の空海は本論を真撰として重視し、一方、天台宗の最澄はこれを偽撰として斥けたが、安然は偽撰としつつも必要に応じてこれを依用するという柔軟な態度を示しているという。空海は密教の優越性を示す根本典籍として本論を重視したが、それに対して、安然は「空海が依用した『釈論』の十識説を円密一教の根柢として受容し、安然みずからの真言宗の

教学に活用した」(一二七頁)のであると著者は指摘している。

## 第五章 「天台止観と『占察經』」

占察善惡業報經(以下、占察經)二巻は中国で六世紀末頃までに成立した偽經であるとされるが、この經の下巻では起信論の所説にもとづき、唯心識観と真如実観の二種の観法(二種観道)が説かれる。既に中国天台において、六祖湛然が占察經に注目し、二種観道を事理二観と関連させて解釈し、又、その門下の石鼓寺の智雲も本經の教説に言及している。この章で著者は、此の經の二種観道が日本天台においてどのように受容されたかを検討する。二種観道は日本天台では初期の頃から注目されたが、円珍に至って、この観法に関し日本天台独自の見解が見られるようになるという。すなわち、著者によれば、円珍は湛然の教説をうけつつ、二種観道を起信論の不变随縁義との関連で解釈し、唯心識観は事観で不变随縁の「心」の立場であり、一方、真如実観は理観で随縁不變の「性」の立場であると明示した。しかも、この二種観道が円珍において、円教の止観法門として受容されていたことを、著者は指摘している。

## 第六章 「天台の性惡説と『大乘止観法門』」

南岳慧思の著作と伝えられる大乘止観法門(以下、止観法門)は従来から盛んに偽撰説が唱えられており、現在それを慧思の撰述でないとする見方が一般である。そして、その著者や成立時期については、慧思や智顗と同時代の撰論系、起信論系の人

物を仮定する傾向が強いようである。この章において著者は、止観法門に説かれる性染説を考察し、止観法門が成立した思想的背景や時期について検討している。すなわち、天台智顗の撰述と伝えられる観音玄義の如來性惡説と止観法門の染淨二性本具説とを比較検討し、その結果、止観法門の性染説が天台の観音玄義に説かれる性惡説の立場を基調とするものであることを論証する。又、止観法門に導入された撰大乘論の三性説や起信論の三大説の内容を検討し、「止観法門は観音玄義の性惡説に立脚して、起信論の三大説や撰大乘論の三性説を釈した」のであり、「天台の性惡説を論証するために起信論や撰大乘論の學説を導入したというべきであろう」(一七二頁)と指摘される。更に、止観法門において如來の教化活動の根柢を六識におく説や、止観の對境を六識心王とする説が説かれるが、それが天台の教説に合致するものであることを著者は論証する。そして、それらの論点にもとづいて、著者は止観法門の成立時期に関し、て、「天台の如來性惡説が確立された『観音玄義』成立(七世紀初頭)以後、止観法門が文献上初出する八世紀中葉、すなわち天台の第六祖荆溪湛然以前の一世紀余りの時期に設定すべきであろう」(二七九—一八〇頁)と述べ、又、その著者について従来の撰論系や起信論系の人物とする説を斥け、天台系の人師によって撰述されたものとの見解を呈している。

## 第七章 「天台の六即と『起信論』」

天台円教に独自の六位説として六即説(理即・名字即・觀行

即・相似即・分真即・究竟即」が立てられるが、日本天台においては六即のうち理に約して凡聖不二や迷悟不二をいう理即が極度に強調されるようになり、理即と起信論の本覚が結びつけて論じられるようになったという。この章で著者は、天台の理即と起信論の本覚とが結びつけられた起源を探り、又その日本天台における展開について検討している。著者によれば、中国天台において本覚を論じたのは湛然門下の智雲が初見である。

彼の著作である妙経文句私志記には六即と起信論の本覚・始覚（不覚・相似覚・随分覚・究竟覚）との関係が論じられており、そこで理即と本覚との結合が初めて明示された。日本天台において、智雲の此の学説の影響がまず円珍に見られるという。次いで理即菩提心を唱えた安然は理即を極端に強調するようになり、そして口伝法門においては「理即と結びつけられた本覚のみがクローズアップされ、本覚は始覚との相対的觀念を離れた絶対的一元論として把えられ、天台口伝をもって天台本覚思想といわしめるに至った」（一九一頁）と指摘される。

## 第八章 「円理随縁説と別理随縁説」

中国の趙宋天台において、山外派の円理随縁説に対して山家派の四明知礼は別理随縁説を主張し、両者の間に激しい論争が重ねられたことは有名である。従来、知礼が別理随縁説を発表した原因は、天台円教を華嚴の終教に同じる学説にあったと説明されるが、そのような学説が知礼当時、あるいは彼以前に具体的に誰によって立てられていたのか、あるいはまた、その学

説の起源が奈辺にあったのかということは明らかにされていない。著者はこの問題に関して、華嚴宗第五祖の圭峰宗密に注目し、彼の教判思想を検討した結果、起信論の真如随縁義と共に法華經（天台円教）が華嚴五教判の中で大乘終教に位置づけられていることを指摘する。そして、「華嚴終教たる『起信論』の随縁説と天台円教を結合せしめた趙宋天台の山外派諸師や華嚴子璿の学説の思想的基盤は宗密の教学の上にあった」のである。「知礼の別理随縁説の主張は、山外派諸師の根柢に流れる宗密の天台円教と華嚴終教とを同ぜしめた立場への批判であった」（二〇二頁）と結論づけている。

## 第九章 「天台の仏身説と『起信論』」

本章は知礼と仁岳との仏身論争を、とくに起信論との交渉という観点から検討したものである。起信論では、報応二身の相違は仏を見る側の事識・業識という心識の差別に依るとされ、応身仏は事識所見であり、報身仏は業識所見であるとされる。

そして、菩薩が業識に依って報身仏を見るのは「初発意」以上の位においてであると説かれるが、華嚴宗の法蔵は起信論義記でこれを十解（十住）以上の位に相当する行位と解釈した。著者は、法蔵の此の解釈を承けた仁岳がそれを天台の円教初住以上の位と見たのに対し、知礼はそれを円教十信位のうち第七信以上の位と理解したことを指摘する。すなわち、業識によって報身を見る位を仁岳は円教の初住位とし、一方、知礼は七信位としたという。このような起信論義記の所説に対する、ひいて

は起信論の所説に対する理解の相違が、両者の仏身論争に関わる一側面として紹介されている。

## 第十章 「妄心観と『起信論』」

本章では、天台止観の対境としての心を真心とみるか、あるいは妄心とみるか、という趙宋天台における所謂「真妄観境」の問題について、著者はとくに起信論の心の解釈との関連で検討を加えている。真心観境説を唱える山外派の諸師に対して、山家派の知礼は妄心観境説を主張した。山外派諸師は起信論の不変・随縁義のうち、不変義（心真如門）を重視する立場から真心観を唱えたが、知礼は山外派のそのような解釈を理に偏した所説であるとして斥け、自らはあくまでも天台の伝統的な性具説に基づく円教随縁義の立場から妄心観を主張し、「近要な

る不変随縁の心、すなわち自己における現今刹那の六識妄心（事）を所観の対境として、随縁不変なる性（理）を顕わすべきことを力説し」（二一八頁）たのであると、著者は論述している。

以上、目次に従い本書の内容を簡略ながら紹介してきた。大乘起信論との思想的交渉という観点から、中国・日本の両天台の諸問題を論じた本書の功績は大きい。本書は天台教学の研究を志す者にとって必読の研究書であると思う。

昭和六三年十月、A5版・二一九頁十二四頁  
五八〇〇円 法蔵館